

ろうたく  
老宅委員会

23年間ずっと途絶えることなく続けられた  
優しさと思いやりをはぐくむ老宅訪問活動



高齢者との触れ合いの中から、優しさや思いやりの心をはぐくんだ

一人暮らし老人の不安感の解消、  
宮守分校生徒の非行と交通事故防止  
一。度重なる課題への解決策として、

当時、宮守駐在所に勤務していた高橋悦男巡査部長が学校に提案したのが、生徒による高齢者宅の訪問活動だった。

昭和61年に始まった活動はその後、「老宅委員会」という生徒会活動に発展。以来、23年間ずっと途絶えることなく続けられてきた。

活動では、生徒たちが単にお年寄りの話し相手になるだけでなく、部屋や風呂の掃除、食器の洗い物も率先してお手伝いした。お年寄りたちからは、さまざまな人生の教訓を教わった。

生徒たちの手作り料理でもてなす交流会や、老人福祉施設での介護実習など、年々活動も広がりを見せた。

少子高齢化、核家族化が進み、コミュニケーションが苦手な若者が増えているといわれる現代。そんな中、情報ビジネス校の生徒たちは23年間にわたる老宅訪問活動の中で、相手をいたわる優しさや思いやりの心をはぐくんできた。

商業科目を専攻する「情報ビジネス校」でありながら、卒業後の進路に福祉分野を選択する生徒が多いのも、老宅委員会の取り組みの成果が大きく影響している。

クローズアップ  
B・I・Sスタイル



『世界がステージ、未来がテーマ』が学校スローガン。  
広い視野と、時代の先を読む活動を展開してきた  
情報ビジネス校の取り組みをクローズアップ。

「自分たちにしかできないことをしよう」と、  
保護者、教職員、地域の人を招待し、一緒に楽しんだ最後の体育祭(2009年8月)

クラブ活動

少ない部員数、限られた練習環境でも  
県大会を制し、全国舞台で活躍見せる

少数精鋭一。情報ビジネス校にはそんな言葉が似合うほど、創立当初から部活動でも目覚ましい活躍を見せてきた。限られた人数の上、練習環境も十分でない中、昭和29年には県定時制野球大会で準優勝。48年には相撲部がインターハイに出場し、49年には野球部が軟式野球大会で県優勝する快挙を成し遂げた。

昭和62年に硬式野球部が発足し、平成元年には県内の高校で2番目となる女子サッカー部が発足した。野球部は平成9年にベスト16、その翌年も3回戦まで進出する活躍を見せ、女子サッカー部は創部10年目となる

平成9年に見事高総体初優勝を飾った。また、弓道部の松田直子さん(H4年卒)はインターハイで準決勝に進出。陸上競技部は箱石公久さん(H8年卒)の日本ジュニアオリンピック5000m競歩8位を筆頭に、多田(旧姓:佐々木)美歌子さん(H11年卒)、佐藤宏一さん、多田正志さん(共にH14年卒)が投てき種目でインターハイと国体に出場。

閉校を目前にした21年の高総体では、女子サッカー部は1人足りない10人で、ソフトテニス部は1ペア足りない状況

の中、最後まであきらめることなく戦い抜き、その勇姿は多くの人の記憶に刻まれた。



1人足りない10人で戦い抜いた最後の女子サッカー部員たち(朝日新聞社提供)

国際交流

小さな町の、小さな学校の新たな挑戦  
生徒も地域も、国際的な視野を広げた

情報ビジネス科の発足とともに、県内高校に先駆けて取り組んだ国際交流。国際感覚の養成を体験的な学習により実現するため、昭和62年に日米高等学校交流プログラムに参加。63年にアメリカ合衆国ワイオミング州にあるデュボイス高校と姉妹校提携し、平成元年3月9日、記念すべき第1回の派遣の日を迎えた。小さな町の小さな学校の生徒たち12人が、広い世界へと旅立った。生徒たちはおよそ1カ月にわたる派遣期間中、現地のホストファミリーと生活を共にしながら学校生活を楽しんだ。

同年6月には、デュボイス高校か

ら10人を迎え、体験学習やクラブ活動で交流を深めた。以来、毎年派遣生を送り出し、迎え入れるという交流が続けられた。また、当時の宮守村は青少年派遣資金貸与制度を創設し、国際交流をバックアップした。

平成5年からは、ニュージーランド・クライストチャーチ市にあるカシミア高校と姉妹校交流を開始。最後となる平成20年まで、交流が続けられた。20年間続いた交流事業で232人を派遣し、226人を受け入れ。互いの文化を理

解し、国際的な視野を広げる取り組みは、生徒だけでなく地域へも大きく波及した。



20年間続いた国際交流。授業や部活動など、約1カ月間留学生と生活を共にした